

## 幼児の言語発達に関する研究 (2)

### 言語発達遅滞児の発達経過についての一事例

研究第5部 丸尾 あき子

#### I 目 的

言語発達遅滞児の発達経過について前回は構文の面から量的に発達の状況を明らかにしたが、今回は質的に機能の面から分析を行ない言語が伝達（コミュニケーション）の手段としてどのように使用されて複雑な変容をしていったかなどの表象内容について検討することにした。

#### II 方 法

指導経過のうち前回使用した第1回、第9回、第16回、第25回、第32回の同資料を検討の対象とした。そうして文字化された一枚ずつのカードについて次の諸点により分析を試みた。

- 1) 聞き手が子どものことばの意味を理解できるもの
  - a 理解可能な言語  
聞き手が発語を場面や状況などの手がかりがなくとも有意味語として認めることができることばで成人語及び幼児語も含まれている。
  - b 一部理解可能な言語  
単語の音の一部だけの発語で場面や状況などの手がかりを加えて理解できることばである。  
なお、理解不可能な言語（喃語的なもの、歪曲されて理解できないものなど）は取り上げなかった。
- 2) 対人関係において言語が伝達の機能をもつかどうかという点から分類した

#### a 無 意 図

聞き手に表現・伝達の意図をもたない言語で反響語や独語、感嘆語などであり、従って聞き手よりの応答を期待しないことばである。

#### b 表 現

子どもから聞き手に対して何かを表現伝達しようとする意図をもつことばで聞き手の応答を期

待することばである。

#### c 応 待

相手側からの話しかけに対して言語で応答して何かを表現・伝達しようとすることばである。

#### 3) 機能の内容を更に次のように分類した

a 独語・b 口まね・c 呼びかけ・d 命名・e 説明・f 命令・g 情緒的言語・h 質問・i 応答などである。

4) また、伝達機能別に文の構造、文の数と長さについても検討を加えた

#### a 文の構造

文節によって区切り一文節、二文節、三文節、多文節（四文節以上）からなる文、並列文、複文に分類した。

#### b 文 の 数

15分間に話された文の数を数えて次のような基準で一文とした。

一文として完成している場合、不完全でも休止できている場合、並列文、複文。

#### c 一文の長さ

一文を構成する品詞数を数えて表わした。

#### III 結 果

##### 1 指導経過による結果

a) 第1回目 2:3-15

(i) 聞き手の理解度からみたことば

第1表

理 解 度	頻 数	%
理解可能	44	93.6
一部可能	3	6.4
合 計	47	100.0

第1表にみるように理解可能なことばは93.6%でかなり明瞭な伝達を果している。

(ロ) 伝達の機能

伝達の機能として子ども側からの自発的な表現の言語と働きかけに対する応答とをみると自発的な表現の言語

第2表

伝達の機能	頻 数	%
無 意 図	1	2.1
表 現	26	55.3
応 待	20	42.6

の方がやや優位である。なお伝達の意図をもたない言語の出現は少ない(第2表)。

(イ) 伝達意図の内容

第3表によれば子ども側から自発的に命名や説明して伝達しようとすることばの出現が一番多く次いでTの働きかけに応待することばで応答、口まね、命名の順である。内容を見ると自発的にコレ、ココ、イタイ、アッタ、

第3表

機 能 別	内 容	頻 数	%
無 意 図	独 語	1	2.1
表 現	呼 び け	1	2.1
	命 名	10	21.3
	説 明	14	29.8
	命 令	1	2.1
応 待	口 ま ね	6	12.8
	命 令	5	10.6
	説 明	2	4.3
	応 答	7	14.9

オチタといって説明したり、カギ、ホームなどと命名して伝達する一方、Tのことばをそのままラッキョウ、クルマ、ハイッタと口まねしたり、ウンと返事やあいづちをうって応答したりしている。

(ニ) 文の構造

伝達の意図をもつ言語、もたない言語のいずれもが殆んど一語文でありそれでコミュニケーションしている(第4表)。

(ホ) 文の数と長さ

第5表でみるように伝達の意図をもたない言語、もつ言語のいずれの機能でも、一品詞の構成が最も多く、子ども側からの自発的な表現の言語に品詞を重ねて話す傾向がみえ始めている。しかし文の数は僅か47で少ない。

第4表

機 能 別	文の構造	頻 数	%
無 意 図	一 文 節	1	100.0
表 現	一 文 節	24	92.3
	二 文 節	2	7.7
応 待	一 文 節	20	100.0

第5表

機 能 別	一文中の品詞数	文の 数	%
無 意 図	1	1	100.0
表 現	1	19	73.0
	2	5	19.4
	3	1	3.8
	4	1	3.8
応 待	1	18	90.0
	2	2	10.0
合 計		47	

以上が初回の結果である。これによると一品詞の構成による一語文で表現して伝達したり応答したりしている。

b) 第9回目 2:5-24

(イ) 聞き手の理解度からみたことば

第6表

理 解 度	頻 数	%
理 解 可 能	204	96.2
一 部 可 能	6	2.8
擬 声	2	1.0
合 計	212	100.0

第6表にみるように一部理解可能なことばは減少し理解可能なことばが増加して伝達は可能になってくる。

(ロ) 伝達の機能

ことばの理解がすすみ働きかけに対してことばで応じる態度があらわれて応答が多くなってきた(第7表)。

第7表

伝達の機能	頻 数	%
無 意 図	23	10.9
表 現	84	39.6
応 待	105	49.5

(イ) 伝達意図の内容

第8表の伝達機能の内容をみると働きかけに対してウンとあいづちをうつ場面が多くなり次いで説明(タッチ・ナイナイ・オジョウズ・コッチ・ノルノ・ママノ), 命令(カミ・ハサミ・プープの名詞や動詞+助詞よりなるトッテ・ツクッテ・カイト・モットなど)など子ども側の要求に結びついたものが多くことばが伝達の機能をもって使用され始める。なお伝達意図のない言語では独語の急激な増加があらわれ内容としてアラダメヨオスワリ・ヤダダメヨ・スワルノ・オンナジなど子ども自身の行動や意図をことばで表現したり遊びの状況を叙述したりするなど自分自身に話しかけながら行動する思考との結びつきがみられる。

第8表

機能別	内容	頻数	%
無意図	独語	23	10.9
表現	呼びかけ	2	1.0
	命名	10	4.8
	説明	36	16.9
	命令	36	16.9
応待	口まね	21	9.9
	命名	11	5.2
	説明	19	8.9
	応答	53	25.0
	質問	1	0.5

(ロ) 文の構造

第9表にみるように伝達の意図をもたない言語と、もつ言語はいまだ一語文が大部分をしめているが自発的に伝達する表現では二語文が30%近い割合で使用されだした

第9表

機能別	文の構造	頻数	%
無意図	一文節	20	87.1
	二文節	1	4.3
	三文節	1	4.3
	擬声	1	4.3
表現	一文節	58	69.0
	二文節	25	29.8
	三文節	1	1.2
応待	一文節	98	93.3
	二文節	5	4.7
	三文節	1	1.0
	擬声	1	1.0

第10表

機能別	一文中の品詞数	文の数	%
無意図	1	18	78.2
	2	2	8.6
	3	1	4.4
	4	1	4.4
	擬声	1	4.4
表現	1	38	45.2
	2	22	26.2
	3	17	20.2
	4	6	7.2
	5	1	1.2
応待	1	82	78.0
	2	14	13.3
	3	6	5.7
	4	1	1.0
	5	1	1.0
	擬声	1	1.0
合計		212	

てきた。

(ハ) 文の数と長さ

伝達の意図をもたない言語と伝達の意図をもつても、応待の段階の言語は共にまだ一品詞の構成がかなり多いが自発的な表現では二品詞・三品詞という組合せがみえ文の数も212と急激に増加して活発な言語活動の状態がみられだす(第10表)。

以上からみると、ことばの理解が可能になり文の数は急激に目立って増加し、ことばで応じる態度がみられるなど、ことばを使用しての交流が出来始めた。Tのことばを模倣して学習する状態もみられる一方、要求を出したり説明したり命名したりなど、伝達の意図をもつ自発語が多くなる。

c) 第16回目 2:7-12

(イ) 聞き手の理解度からみたことば

第11表に示したように擬声の使用が目立ち、一部理解可能な言語は更に減少して、理解可能な言語が話される

第11表

理解度	頻数	%
理解可能	138	90.8
一部可能	1	0.7
擬声	13	8.5
合計	152	100.0

ようになる。

(ロ) 伝達の機能

伝達の意図をもたない言語の出現もみられる一方、伝達の意図をもつ言語では、前回と同時に、表現に比べて応待の言語の方の出現がやや多い(第12表)。

第12表

伝達の機能	類数	%
無意図	18	11.9
表現	61	40.1
応待	73	48.0

(ハ) 伝達意図の内容

第13表にみるように伝達の意図をもつ言語のうち応答の出現が一番多く自発的な説明がこれに次ぐ。そうして質問があらわれた。

内容を見ると、10エンモッテ、オタータヌイデ、ハンナイヨ、トマトヤイテルノ、モツケル、キッタワヨコレ、コレヤルノ、キツケカラネなどといって自発的に叙述したり意志を表現し、また応答して説明したりしている。そうしてコレハ?、イレナイノ?、フーセンハ?、ヤイタイノ? などと質問したりして子ども側からの言語活動がさかんになってくる。

第13表

機能別	内容	類数	%
無意図	独語	18	11.9
表現	命名	8	5.3
	説明	34	22.3
	命令	11	7.2
	質問	8	5.3
応待	口まね	10	6.6
	命名	6	3.9
	説明	16	10.5
	応答	40	26.3
	命令	1	0.7

(ニ) 文の構造

伝達の意図をもつ言語のうち応待の一語文が目立って多い。伝達の意図のない言語では擬声が増加をみせている。炊飯器から水をこぼしてジャーとかボールをけり返してトーン、風せんを飛ばしてジャンのように動作や遊びにともなって発する音を楽しむ独語が大きな割合をしめる(第14表)。

第14表

機能別	文の構造	類数	%
無意図	一文節	6	33.3
	擬声	12	66.7
表現	一文節	37	60.7
	二文節	20	32.8
	三文節	4	6.5
応待	一文節	66	90.4
	二文節	5	6.8
	三文節	1	1.4
	擬声	1	1.4

(ホ) 文の数と長さ

第15表によれば、前述したように伝達の意図はもたないが遊びにともなって発せられる擬声が目立つ。伝達の意図をもつ言語では前回と同じように自発的な表現の方に品詞を重ねて話す長い文が出現し始めている。文の数は再び減少をみせている。

第15表

機能別	一文中の品詞数	文の数	%
無意図	1	6	33.3
	擬声	12	66.7
表現	1	16	26.2
	2	17	27.9
	3	13	21.3
	4	9	14.8
	5	5	8.2
	7	1	1.6
応待	1	58	79.5
	2	6	8.2
	3	6	8.2
	4	2	2.7
	擬声	1	1.4
合計		152	

以上の結果から文の数の増加ということより内容的な変化がみられる。理解可能な言語が多くなる。自発的な表現に長い文の出現が増加する一方、無意図的に擬声を発して音を楽しむ状態が目立つという工合である。

d) 第25回目 2:11-8

(イ) 聞き手の理解度からみたことば

第16表にみるようにことばの意味理解がすすみ理解可能、一部理解可能な言語の出現が多くなり文の数も再び増加をみせている。

第16表

理解度	頻数	%
理解可能	216	97.3
一部可能	5	2.3
擬声	1	0.4
合計	222	100.0

(ロ) 伝達の機能

第17表に示したように伝達の意図をもたない言語は減少をみせ伝達の意図をもつ言語はTの働きかけに応じるもの、子ども側から自発的に表現するものの両方に言語活動の活発なうごきがみられる。

第17表

伝達の機能	頻数	%
無意図	9	4.1
表現	104	46.8
応待	109	49.1

(ハ) 伝達意図の内容

第18表の伝達機能の内容をみると子ども側からの自発的な説明、働きかけに応じる応答に言語活動の活発な状態が目立っている。内容としてサムイカラネ、コワイヨ一ッテ、オコッテルワンワンのような情緒的表現やアラマタココオニンギヨヤッデルヨ、ウルチャイナンダッテジョーシャンヤッテルヨ、オミジュノジョーシャンガヤツタコヤッテ、コレナンカシューシューッタクチカラデテキヤッタヨなど動作の細かい説明があらわれ出している。

第18表

機能別	内容	頻数	%
無意図	独語	9	4.1
表現	呼びかけ	4	1.8
	命名	7	3.2
	説明	65	29.3
	命令	15	6.7
	質問	13	5.8
応待	口まね	7	3.2
	命名	10	4.5
	説明	28	12.6
	応答	61	27.5
	命令	2	0.9
	質問	1	0.4

(ニ) 文の構造

伝達の意図をもつ言語のうち応待の一語文は相変わらず多いが自発的に表現しようとするこばでは二語文以上の出現がめざましい(第19表)。

第19表

機能別	文の構造	頻数	%
無意図	一文節	6	66.7
	二文節	1	11.1
	多語文	1	11.1
	擬声	1	11.1
表現	一文節	33	31.7
	二文節	35	33.7
	三文節	24	23.1
	多語文	12	11.5
応待	一文節	89	81.7
	二文節	11	10.1
	三文節	6	5.5
	多語文	3	2.7

第20表

機能別	一文中的品詞数	文の数	%	
無意図	1	5	55.6	
	2	1	11.1	
	5	1	11.1	
	8	1	11.1	
	擬声	1	11.1	
	表現	1	16	15.4
表現	2	14	13.4	
	3	17	16.3	
	4	21	20.2	
	5	13	12.5	
	6	10	9.6	
	7	9	8.6	
	8	1	1.0	
	9	1	1.0	
	10	1	1.0	
	14	1	1.0	
	応待	1	77	70.6
		2	9	8.3
		3	10	9.2
		4	5	4.6
5		4	3.7	
6		1	0.9	
7		3	2.7	
合計		222		

## (㉞) 文の数と長さ

第20表にみるように伝達の意図をもつことばではTの働きかけに応じる言語活動が極めて活発であるが、長い文になると、子ども側からの自発的な働きかけのことばの方が優位である。なお、文の数も222となって再び増加をみせている。

以上からみると、Tの働きかけに応じることば、子ども側からの自発的な表現のことばの両方に言語活動の活発な状態がみられ長い文になって丁寧な説明が可能になる。

## e) 第32回目 3:2-28

## (i) 聞き手の理解度からみたことば

第21表に示したように一部理解可能なことばを除き文の数は急激に減少している。

第21表

理解度	頻数	%
理解可能	142	96.6
一部可能	5	3.4
合計	147	100.0

第22表

伝達の機能	頻数	%
無意図	2	1.4
表現	42	28.5
応待	103	70.1

## (ii) 伝達の機能

第22表によれば伝達の意図をもたない言語は更に減少して伝達の意図をもつ言語のうちTの働きかけに応じることばが著しく活発である。

## (i) 伝達意図の内容

第23表

機能別	内容	頻数	%
無意図	独語	2	1.4
表現	呼びかけ	4	2.7
	説明	24	16.3
	命令	9	6.1
	質問	5	3.4
応待	口まね	5	3.4
	命名	8	5.4
	説明	48	32.7
	応答	42	28.6

Tの働きかけに応じて説明する言語の出現がめざましく応答がこれに次ぐ。自発的に説明する言語の方にも伝達表現の発達がみられる。内容をみると働きかけに応じる言語ではソーjanyaクッテネと前おきしてアノネオニクガネヤスインデス、ヤサイトウッテマスグレーブスモウッテマスなど状態の説明をしたり、自発的な表現になるとオツカイイッテクルカラオルスバンシテテヨ、アッチノミギガワニアリマスオミセ、オオキナユビワ100エインデス、イママッテマッテママガ、イマオシエテアゲルカラのように複文も話されだす(第23表)。

## (ii) 文の構造

第24表にみるように伝達の意図をもつ言語では働きかけに応じる応待の一語文が相変わらず多く二語文以上の出現も増加しているが自発的に子ども側から表現する言語の方に二語文、三語文というような文節数の多い長い文の出現が目立っている。

第24表

機能別	文の構造	頻数	%
無意図	一文節	1	50.0
	擬声	1	50.0
表現	一文節	14	33.3
	二文節	12	28.6
	三文節	11	26.2
	多語文	4	9.5
	複文	1	2.4
応待	一文節	73	70.9
	二文節	17	16.5
	三文節	9	8.7
	多語文	3	2.9
	並列文	1	1.0

## (iii) 文の数と長さ

第25表をみると伝達機能の有無にかかわらず表現を除いて一品詞の構成が半数を占めて文の数は147と急激に減少しているが子ども側からの自発的な表現は品詞を重ねて話す言語活動の活発な傾向が前回と同様にみられている。

以上終結に近づく頃になると言語に対する理解がすすみ、働きかけに応じる言語活動が益々活発になる一方、子ども側からの自発的な表現の言語活動も活発になり多語文・並列文・複文などと発達をみせ接続助詞カラを使用しての細かい説明が可能になる。

第25表

機能別	一文中の品詞数	文の数	%	
無意図	1	1	50.0	
	擬声	1	50.0	
表現	1	10	23.8	
	2	8	19.1	
	3	8	19.1	
	4	6	14.3	
	5	3	7.1	
	6	2	4.7	
	7	3	7.1	
	8	1	2.4	
	10	1	2.4	
	応待	1	58	56.3
2		15	14.5	
3		9	8.7	
4		9	8.7	
5		6	5.8	
6		2	2.0	
7		2	2.0	
8		1	1.0	
11		1	1.0	
合計		147		

2 発達の考察

(1) 聞き手の理解度

第26表

理解度	第1回目		第9回目		第16回目		第25回目		第32回目	
	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%
理解可能な言語	44	93.6	204	96.2	138	90.8	216	97.3	142	96.6
一部理解可能な言語	3	6.4	6	2.8	1	0.7	5	2.3	5	3.4
			2	1.0	13	8.5	1	0.4		
擬声										
合計	47		212		152		222		147	

第26表にみるように理解可能な言語は各段階とも90%以上を占めており殆んどが伝達可能なわけである。一部理解可能な言語は増えたり減ったりして理解可能な言語へと習得過程をみせている。また一時期に擬声の急激な発達もみえていて言語的伝達の意図は活発である。

(2) 伝達の機能

第27表

伝達の機能	第1回目		第9回目		第16回目		第25回目		第32回目	
	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%
無意図	1	2.1	23	10.9	18	11.9	9	4.1	2	1.4
表現	26	55.3	84	39.6	61	40.1	104	46.8	42	28.5
応待	20	42.6	105	49.5	73	48.0	109	49.1	103	70.1
合計	47		212		152		222		147	

言語活動のうち伝達意図のない言語は第16回回は増加するが以後減少する。子ども側から自発的に表現伝達しようとする言語とTの働きかけに応待する言語は共に各段階とも活発な動きがみられ特に第9回以降は応待による言語活動の伝達意図の発達の方が優れている。なお、Tからの働きかけは条件の設定を行わず自然の会話のやりとり結果であるため、全体の文の数は表現に比べて応待の頻度が高くなってきているといえる。詳細な結果は応答量(応答、無答、返事にならない発語など)、応答内容(模倣応答、訂正応答、拡充応答など)の分析を行わなければならないが、今回は行わなかった。いずれにせよ伝達の機能は増減の形を辿りながら発達をしている(第27表)。

(3) 伝達意図のない言語の内容

第28表

無意図	第1回目		第9回目		第16回目		第25回目		第32回目	
	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%
	1	2.1	23	10.9	18	11.9	9	4.1	2	1.4
情緒命名	1	2.1	10	4.7	5	3.3	5	2.2	1	0.7
説明			2	0.9						
擬声			10	4.7	1	0.7	2	0.9		
質問			1	0.6	12	7.9	1	0.5	1	0.7
							1	0.5		

独語 伝達に意図のない言語は第9回目、第16回目に出現が多く内容にも変化がみられる。アツなどの情緒的表現やヤダ、ダメヨ、オスワリ、オンナジなどと玩具や椅子や自分自身に対して意図をいったり説明をしたりすることばやジャーン、トーン、ジャーのように動作をして音を楽しむことばがあらわれている。しかし発達につれて減少していく。

(4) 伝達意図をもつ言語の内容

第29表によれば伝達の意図をもつ言語のうち子ども側から自発的に表現することばに比べ働きかけに対して応答することばの方に出現の優位さがみられる。これらの内容をみると次の通りである。

命名 伝達の意図をもつ言語のうち命名は「これは？」とか「それはなに？」という質問に答えてブーブ、デンシャ、ボール、アンヨ、チョコレート、ゾーサンのように玩具・身体・食物・動物など身辺の名称から、自発的に表現するイマ、ミギ、ナカ、オトなど抽象的なことばへと習得の拡がりをみせているが、発達につれて眼前の事象から離れて会話が成立するようになると減少していく。

説明 次ぎに説明の機能をもつことばは働きかけに対するの応答になるとゴアン、ココ、40エンなど一語文による表現から指導が進むに従いハンパークガデキル、オダイドコヤッテンノ、オサイフハナイデス、ソージャナクッテネ、ココヘスワッテイイなどのように叙述、状態、理由、意図などについて主語、述語からなる文形式によって伝達が行われ次第にオツカイイッテクルカラオルスパンシテテヨのような複雑な文も話されるようになり出現量も増加していく。また子ども側からの自発的な説明は増減の経過をたどりながら広範囲な内容の変化をみせて伝達が可能になっている。内容をみると、情動感覚(カワイイノ、ヨカッタ、イタイヨ、サムイカラネ)叙述的表現(ワンワンツイテル、ココニ5ニノルヨ、ミンナネテル、シュッシュューッテノムノ、オオキナニビワ100エンデス、アッチノミギガワニアリマス)批評(ダメ、オジョウズ)意図(ヤクノ、モッテクル、ヤイテルノヨ、イマアゲマス、コレイレルノ、イマオツカイイッテクルカラ、イマオシエテアゲルカラ)などである。

命令 伝達の機能をもつことばとしての命令は当然の事ながら自発的な表現に出現が多く場面を馴れた第9回目には急激な増加がみられる。最初はアンヨ、ブーブ、カミ、ドータンのように一語文の名詞で要求を表現し次ぎにモット、ツクッテ、トッテ、カイトなど動詞+助詞(テ)の形式で願望を現わし更に進むとKチャンガヤルノ、コンドコレスルノヨ、コレコボサナイデネ、コレタバナサイ、スワッテイナサイ、ココドイテクダサイ、チョットマッテクダサイのように文形式で意志禁止命令など説明がなされ自我の芽生えと共に発達がみられていく。

質問 次第に質問があらわれはじめており出現は命令の場合と同様に自発的な表現における質問が多く対人関係において言語の伝達がさかんになってきたことがうかがえる。質問の形式としては第30表に示したように単なるウン?のきき返しがイレルノ?・フウセンハ?のように尻あがりのイントネーションで表現する形となり次第にドコイクノ?、ナニシテルノ?、ホラコレノホウが大キイデショウ?、カイモノイデスカ?、ナンノオトデショウネ?、ココドコイッタカナ?などのように疑問詞

第29表

表現	第1回目		第9回目		第16回目		第25回目		第32回目	
	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%
呼びかけ	1	2.1	2	1.0			4	1.8	4	2.7
命名	10	21.3	10	4.8	8	5.3	7	3.2		
説明	14	29.8	36	16.9	34	22.3	65	29.3	24	16.3
命令	1	2.1	36	16.9	11	7.2	15	6.7	9	6.1
質問					8	5.3	13	5.8	5	3.4
応待	20	42.6	105	49.5	73	48.0	109	49.1	103	70.1
口まね	6	12.8	21	9.9	10	6.6	7	3.2	5	3.4
命名	5	10.6	11	5.2	6	3.9	10	4.5	8	5.4
説明	2	4.3	19	8.9	16	10.5	28	12.6	48	32.7
応答	7	14.9	53	25.0	40	26.3	61	27.5	42	28.6
質問			1	0.5			1	0.4		
命令					1	0.7	2	0.9		

第30表

質問	第1回目		第9回目		第16回目		第25回目		第32回目	
	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%	頻数	%
きき返し	2	100.0	1	50.0	10	55.6	8	34.8	8	61.5
語尾の抑揚をあげる					6	33.3			3	23.1
疑問詞の使用			1	50.0	2	11.1	15	65.2	2	15.4
(事物)					2	100.0	10	66.6	2	100.0
(場所)			1	100.0			5	33.3		
合計	2		2		18		23		13	

の使用がみられて質問したり状態を説明したり同意を求めたり独語するなど豊富な使用が可能になる。

口まね 伝達意図をもつ言語のうち働きかけのことばをそのまま模倣して答える状態は最初の段階が多く次第に減少していく。たとえば走るの→ハチ、くるま→クルマ、それはおまど→オマド、はっぱもつけて→チュケテなどのようでありこれにより言語の習得過程の側面がうかがえる。

応答 働きかけに対する言語的応答の割合は各段階とも出現が多く言語による伝達機能の発達がみられる。内容はウン、ハイのあいづち、返事が主であるが次第にコレハネパンの命名から4ツイレルノ、ココネチャッタ、イッパイノッテル、オサトウハイッテルワヨ、オダイド

コヤッテンノのように説明へと発達している。

(4) 文の構造

第31表は伝達の意図をもたない言語である。いずれも一文節よりなる文構成が殆んどであり増えたり減ったりして発達の経過を辿っている。ジャー、トーン、ジャンのように遊びに伴って発せられる擬声は遊びの範囲が広まり運動が活発になるにつれてみられている。次に

第31表

無意図	第1回目	第9回目	第16回目	第25回目	第32回目
	頻数 %	頻数 %	頻数 %	頻数 %	頻数 %
一文節	1 100.0	20 87.1	6 33.3	6 66.7	1 50.0
二文節		1 4.3		1 11.1	
三文節		1 4.3			
多語文				1 11.1	
擬声		1 4.3	12 66.7	1 11.1	1 50.0
合計	1	23	18	9	2

内容を見ると玩具などをみてアッという簡単な情緒表現からスワルノ、ヤダヨ、アラトマッチャッタヨ、アレコッコドコイッチャッタカナのように自分の行動や意図、あそびの叙述、自問自答などが文形式になってあらわれ思考の発達がうかがえる。

第32表

表現	第1回目	第9回目	第16回目	第25回目	第32回目
	頻数 %				
一文節	24 92.3	58 69.0	37 60.7	33 31.7	14 33.3
二文節	2 7.7	25 29.8	20 32.8	35 33.7	12 28.6
三文節		1 1.2	4 6.5	24 23.1	11 26.2
多語文				12 11.5	4 9.5
複文					1 2.4
合計	26	84	61	104	42

第32表は子ども側から自発的に表現して伝達する言語である。表にみるように文の数は第25回目は増加するが第32回になると急に減少する。これは最初は一語からなる文が多いが次第に減少して文節数の多い文が話されるようになるからである。即ち自発的に表現伝達する言語は指導がすすむにつれて、長い文が話されて発達がみられていく。内容を見るとブーブ、デンシャ、10エンのように一語からなる命名からコレテープ、コレアンヨと代名詞+名詞の組合せがコレキッタワヨ、コレスルノのように助詞が使用されて叙述に変わりコッコヤッバリヤッテルノラッパ、シュシュツテヤルノコウヤッテ、コウ

ヤッテオトウサンヤルノ、アラマタココオニンギョウヤッテルヨ、オツカイイッテクルカラオルスバンシテテヨなどのように文が長くなって説明が可能になっていく。

第33表

応待	第1回目	第9回目	第16回目	第25回目	第32回目
	頻数 %	頻数 %	頻数 %	頻数 %	頻数 %
一文節	20 100.0	98 93.3	66 90.4	89 81.7	73 70.9
二文節		5 4.7	5 6.8	11 10.1	17 16.5
三文節		1 1.0	1 1.4	6 5.5	9 8.7
多語文				3 2.7	3 2.9
並列文					1 1.0
擬声		1 1.0	1 1.4		
合計	20	105	73	109	103

第33表も第32表と同じく伝達機能をもつ言語でありこれはTの働きかけに対して応答することばである。各段階とも一語で応答することが多く次第に文節数の多い文が話されていく。内容を見ると最初は働きかけに対してウンの返事、あいづちが多く次いでコノヒトドーン、イッパイハイッテル、コレイレテルなどの説明からヤサイトウツテマスグレープスモウツテマスのような長い文で応答出来るようになり発達がみられる。

(5) 文の数と長さ

第34表は伝達の意図をもたない言語について一文を構成する品詞数から文の長さを調べたものである。各段階とも一品詞の構成が多いが第9回目、第25回目に品詞数の多い長い文の出現がみられ両者は質的に異っている。即ち文の数としては9回目が一番多いが25回目は文の数は減りその変わり品詞を重ねた長い文が話されるようになり、これにより思考の発達がうかがえる。また第16回には音を楽しむ擬声が多い。

第35表は伝達の意図をもつ言語であり子ども側から自発的に表現して伝達しようとするこばについての文の長さや数を調べたものである。これによると第25回迄は一品詞の構成によるこばは急激に減少をみせ変って品詞を重ねる長い文が話されるようになり文の数も増加をみせている。終結近くなると語数は少なくなるが内容的に長い文の出現がみられてくる。これにより自発的に表現伝達しようとする言語に伝達意欲の活発な動きの状態がうかがえる。

第36表は伝達の意図をもつ言語のうち、Tの働きかけに対して応答することばであり次第に品詞数が多くなり長い文が話されるようになっていく。これを自発的に表現伝達しようとするこばと比べてみると応待の場合、

第34表

無 意 図	一文中の 品 詞 数	第 1 回 目	第 9 回 目	第 16 回 目	第 25 回 目	第 32 回 目
		文の数 %	文の数 %	文の数 %	文の数 %	文の数 %
	1	1 100.0	18 78.2	6 33.3	5 55.6	1 50.0
	2		2 8.6		1 11.1	
	3		1 4.4			
	4		1 4.4			
	5				1 11.1	
	8				1 11.1	
	擬 声		1 4.4	12 66.7	1 11.1	1 50.0
	合 計	1	23	18	9	2

第35表

表 現	一文中の 品 詞 数	第 1 回 目	第 9 回 目	第 16 回 目	第 25 回 目	第 32 回 目
		文の数 %	文の数 %	文の数 %	文の数 %	文の数 %
	1	19 73.0	38 45.2	16 26.2	16 15.4	10 23.8
	2	5 19.4	22 26.2	17 27.9	14 13.4	8 19.1
	3	1 3.8	17 20.2	13 21.3	17 16.3	8 19.1
	4	1 3.8	6 7.2	9 14.8	21 20.2	6 14.3
	5		1 1.2	5 8.2	13 12.5	3 7.1
	6				10 9.6	2 4.7
	7			1 1.6	9 8.6	3 7.1
	8				1 1.0	1 2.4
	9				1 1.0	
	10				1 1.0	1 2.4
	14				1 1.0	
	合 計	26	84	61	104	42

一品詞の構成で答えることばが各段階とも大部分を示めており自発的な伝達のことばの方に品詞を重ねて話す長い文の出現が多い。このことから言語発達においては大人からの働きかけに回答させるよりも自発的に表現伝達する意欲を高めていく指導が重要であるといえる。

3 要 約

2才3カ月より3才3カ月までの一年間言語指導を行ない録音により収録されたことばを文字化して言語発達の状況を伝達機能の面から検討してみた。

1) 初回では伝達の意図をもつ言語、もたない言語のいずれもが一語である。

2) 第9回ではことばで応じる態度があらわれる一方要求をことばで使用し始める。独語の急激な増加も目立つ。

3) 第16回では子ども側からの自発的な伝達活動がさ

かんになり擬声を楽しむ状態がみられる。

4) 第25回では働きかけに応じることば、自発的に表現することばの両方に言語活動の活発なうごきがみられる。

5) 第32回では働きかけに応じる言語活動が著しく活発である。また子ども側からの自発的な表現の方に長い文があらわれている。

6) 伝達意図のない独語は発達につれて減少していく。

7) 伝達機能をもつ言語のうち命名は発達につれて減少していく。

8) 説明の機能をもつことばは一語文から複語文へと発達し出現も増加していく。

9) 命令は自我の芽生えと共に発達がみられ9回目には急激に出現が目立っている。

丸尾：言語発達遅滞児の発達経過についての一事例

第36表

応 待	一文中の 品 詞 数	第 1 回 目		第 9 回 目		第 16 回 目		第 25 回 目		第 32 回 目	
		文の数	%	文の数	%	文の数	%	文の数	%	文の数	%
	1	18	90.0	82	78.0	58	79.5	77	70.6	58	56.3
	2	2	10.0	14	13.3	6	8.2	9	8.3	15	14.5
	3			6	5.7	6	8.2	10	9.2	9	8.7
	4			1	1.0	2	2.7	5	4.6	9	8.7
	5			1	1.0			4	3.7	6	5.8
	6							1	0.9	2	2.0
	7							3	2.7	2	2.0
	8									1	1.0
	11									1	1.0
	擬 声			1	1.0	1	1.4				
	合 計	20		105		73		109		103	

10) 質問は次第にあらわれはじめ豊富な使用が可能になる。

11) ロまねは最初の段階が多く次第に減少していく。

12) 働きかけに対する言語的応答は各段階とも出現が多く言語による伝達が盛んになる。

13) 文節数から伝達の意図をもたない言語をみると一文節が殆んどであるが次第に文形式もあらわれて自問自答したりしている。

14) 伝達の意図をもつ言語を文節数からみると働きか

けに応答することばに比べて自発的に表現することばの方に長い文が多く発達がすぐれている。

15) 品詞数から伝達の意図をもたない言語をみると発達につれて、品詞数を重ねて話す長い文の出現がみられる。

16) 伝達の意図をもつ言語を品詞数からみると文節数の場合と同じく自発的に表現伝達する言語の方に長い文の出現が多い。